

氏 名 子 島 進

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第357号

学位授与の日付 平成11年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 『カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容

－宗教共同体と開発の視点から－』

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 栗田 靖之

助 教 授 栗本 英世

助 教 授 杉本 良男

教 授 小杉 泰（京都大学）

教 授 松井 健（東京大学）

本論文は、パキスタン北部カラーコラムにおける「ジャマーアト」の変容を、開発との関係から論じている。ジャマーアトとは、イスラームの一宗派であるイスマール派の宗教共同体を指している。シーア派系統の少数派である同派は、アリーの直系子孫を最高指導者(イマーム)として奉じることが特徴である。現在は、パリ近郊に本拠を置く第49代イマーム、アーガー・ハーン四世に従う。原則として外部からの改宗者を受け入れず、宗教儀礼を排他的に行うため、イスマール派のジャマーアトは「閉鎖的」あるいは「秘密主義」といったイメージで語られてきた。またそこには、「暗殺教団」のイメージがつきまとっている。

しかしながら、特に1980年代以降、イスマール派はその対外的な印象を大きく変える「開かれた」方向へと変化しつつある。カラーコラムでは同派の分布地域を中心にして、学校教育や保健事業、農村開発のための組合活動など多彩な社会開発事業を活発に展開している。イマーム主導のもとに進行するこれらの事業には「非宗派的」なNGOの形式が与えられており、他宗派住民をも巻き込みながらローカルなレベルでの行政サービスを代行している。その影響力は同派の分布地域ではパキスタン政府のそれを上回っている。しかしイスマール派は、開発を武器に他宗派住民の改宗を図っているわけではない。むしろそのNGO活動において、宗教色は極力抑えられている。アーガー・ハーン四世の発言も、「住民参加」を押し出すなど、有力な社会開発の言説に則ったものであり、ヒューマニストあるいは有能な開発指導者としてのそれである。また村々で「草の根の活動」に従事するイスマール派住民も、「対外的な二元主義」ともいうべき、内面の信仰と世俗の活動を切り離す、イスラームとしては一見きわめてユニークな態度を一貫して保持している。このような同派の姿勢ともあいまって、カラーコラムにおけるNGO活動は、開発学の分野から「貧しい山地農民の自立を引き出す活動」として注目を集め、その応用可能性が議論されるにいたっている。しかしその一方で、この開発を宗教との関係からとらえようとする試みは、これまで行われてこなかった。本論文では、この「アーガー・ハーンの開発」こそが、イマームを頂点とするジャマーアトを活性化し、同派の新たなアイデンティティを創造するための仕組みとなっていることを論じ、開発を通して生き残りを図る現代イスマール派の特徴を明らかにした。これによって、同派の研究に新たな知見をもたらしたばかりでなく、開発を個々の事業評価からではなく、文化的現象として包括的に論じることの重要性を具体的に提示することができた。

序論においては、今日イスラームが活性化する状況でのイスマール派の立場を明らかにした。現在のイスラームは、総体として厳格な唯神論、聖典重視、信徒の平等を重視する方向へと向かっている。これに対してイスマール派の特徴は、イマームの血統を絶対視し、個人を神格化する傾向をもっている。さらに今日同派の中核を担うのは、ホージャと呼ばれるカラーチーを本拠とするビジネス・コミュニティであるが、彼らはイマーム概念をヒンドゥー的に解釈する教義を発達させてきた。しかし「イスラーム主義者」と呼ばれる、自らの主張を押し通すためには暴力的手段を採用することも辞さない急進的な集団がパキスタンの政治で影響力を獲得するにおよんで、イスマール派は自己のイメージの変革を迫られるようになっていく。この文脈で同派が選択したのが、カラーコラム

における開発だった。峻険な山岳地帯のジャマーアトは、ホージャと異なり経済的には貧しい山地農民によって構成されており、また教義もヒンドゥー的な解釈とは無縁である。さらに山地特有の地域共同体は、スンナ派やシーア派とイスマール派が共生する空間でもある。宗派を超えた山地農民の「自立のための活動」を前面に打ち出すことで、ホージャの間では「ヴィシュヌ神の最後の化身」とされていたイマームが、「開発指導者」として堂々と登場することになったのである。

カラーコラムでは、1970年代初頭まで、ラージャーと呼ばれる支配者が水系ごとに成立した小国を統治していた。これら小国が廃止され、この地域がパキスタン政府へ完全に統合されたとき、政府は十分な行政サービスを住民に提供できなかったばかりか、その構造的な腐敗によって、失望をもたらすことになった。この間隙を縫って浸透した「アーガー・ハーンの開発」は、山地農民たるジャマーアトを「自立」させる役割を果たしているが、その過程は同時にイマーム集権制による同地の農民宗徒の強力な取り込みともなっている。アーガー・ハーンの診療所で生まれ、その学校で学んだ若い世代から登場した指導者たちは、まさにこの開発の産物であり、次のような特徴を備えている。

- ・宗徒の間の平等主義を体現する存在である。
- ・高等教育を受けており、英語の読み書き能力を有する。
- ・血統によってではなく、事務能力によって組織運営を任されている。

ここに、かつてイマームと宗徒との間の霊的媒介者であること宗教的正統性の基盤としていた「ピール」の指導からの大きな変化がうかがえる。イマームによる開発は、地方に根ざした伝統的な宗派指導者ピールを通してではなく、NGOに代表される現代的な組織を通して、自らと宗徒を結ぶ回路ともなっている。それはまた高度に組織化されたジャマーアトの構築を意味しているが、その運営には村レベルにおいても「国際的な言語」である英語と、それに基づいた事務能力が称揚されている。ここでの支配的な価値観は、西洋において「普遍的」とみなされているものと重なっている。まさしくこの点に、イスマール派は自らのイメージを操作し、現代社会において積極的なアイデンティティを打ち出す可能性を見出している。

この操作は、グローバルな潮流とローカルな変容、さらにパキスタンという国レベルでの開発をめぐる力関係が連動する、きわめて錯綜した場で行われている。この点はアーガー・ハーン四世の開発言説を検討することで、より明確に理解されることになった。きわめて洗練された形で現れる彼の社会開発に関する発言は、村での活動を巧みに翻訳・変換し、主流の開発言説に則った形で提示する。そして特に世界銀行との間に築き上げられた親密な関係を基盤に、パキスタン政府から協調関係を引き出し、自らが統率するジャマーアトの自律性を確保するものとなっている。「開発指導者」としての四世の発言こそが、ジャマーアトにおける「持続可能な開発」の鍵を握っている。

今後いっそうのグローバル化が進む中で、カラーコラムにおいて端的に表現された開発重視の方針は、イスマール派の中で加速されていくことが予想される。多様な意味を担いながら、「開発」は今後も同派のトレードマークであり続けるだろうし、それによって宗派の統合と、より穏健で実用的な成果を尊ぶ勢力とのいっそうの連携が図られることになるだろう。開発を通して同派は新しい展開を見せている。この点をカラーコラムの事例から明らかにしたことが、本論文最大の意義である。

論文の審査結果の要旨

本論文は、パキスタンのカラーコラム地方の村落で行われた長期の現地調査と文献研究の成果に基づき、イスラームの1宗派であるイスマール派の宗派共同体「ジャマーアト」が、社会開発N G Oと宗派組織の構築を通じて、他宗派との関係を問題として顕在化させることを避けながら、どのような変容をとげているのかについて論じたものである。

イスマール派は、イスラーム教シーア派系の少数派であるが、つよい閉鎖性、排他性を持ち、「秘密主義」、「暗殺集団」のイメージをもたれてきた。しかし、イスマール派の一部は、1970年代以降「開かれた」方向に大きく自己変革をはかっている。本論文でとりあげられた「アーガー・ハーン開発ネットワーク」は、こうしたイスマール派の活動の新しい展開を象徴するものといえる。このような特殊なイメージをもたれながら、新たな局面をむかえているイスマール派についての研究はほとんど先例をみないが、本論文は、開発N G Oの活動が集中しているカラーコラム地方における綿密な調査資料に基づいて、変容過程のさなかにある宗派共同体の実情を明らかにしようとした意欲的な研究である。

本論文は、全体が、先行研究を批判的に再検討しながら、本論文の目的・意義について述べた序論と、3部7章の本論部分、それに結論からなっている。

第1部は、調査の舞台となったパキスタン北部のギズル地方について、民族誌的、歴史的に概観した部分である。第1章では、カラーコラムのイスマール派の分布、ギズル地方について概観したのち、調査村ビンガル村の社会組織、生業などについて述べている。第2章では、パキスタン独立以前にラージャーが支配する小王国の体制下にあったギズル地方の状況について概観している。

第2部では、変革を遂げつつあるイスマール派について述べられている。第3章では、イスラーム教のなかでのイスマール派の系譜と位置が述べられ、第4章と第5章では、19世紀以降カラーコラムに進出したイスマール派が、ラージャー制下のこの地域に定着していった過程について述べている。第4章では、イギリス支配のもとで、かつての宗教的権威であった伝教師ピールの力が衰退したかわりに、学校教育を振興し、普及させることで宗派共同体「ジャマーアト」を再編・構築していった過程が述べられる。ついで、第5章では、こうした教育の振興を通じて構築された宗派組織がじっさいどのような形態であるかについて詳細に記述されている。

第3部は、「非宗派性」を掲げたN G Oの活動を通じたイスマール派の社会開発戦略について述べている。第6章では、草の根の「住民参加」の強調と、これを住民自身がいかに認識し参加しているかについて、現地調査資料に基づいて人びとの心の機微に触れるまでの詳細な記述がなされている。さらに、第7章では、開発N G Oの活動などを通じて宗派の生き残りをはかる新しいタイプの指導者アーガー・ハーン4世の言説について、これも一次資料によって詳細に記述・検討されている。

結論部では、これまでの議論を要約し、アーガー・ハーン4世の指導のもとでのカラーコラムのイスマール派の新しい動きについて、とくにその現代的な意義が強調されて締めくくられている。

このように、本論文は、当該社会における綿密な調査資料と、またイスマール派の

出版物などの文献資料もあわせて検討することにより、イスマール派の新たな局面を明らかにしている。論述の方法も明快であり、辺境地帯にたちあられた最先端の組織・制度の実態をよく浮き彫りにしている。イスマール派の実態についてはこれまで少数ながら先行研究の例はあるものの、インド亜大陸、東アフリカ、欧米などの都市的なビジネス・コミュニティ「ホージャ」のみがあつかわれたにすぎず、また理論的にも「開発」と「宗教」がそれぞれ別の文脈で論じられる傾向があった。これに対して、本論文で、農村におけるイスマール派の活動の実態と、宗教と開発の表裏一体性が明らかにされたことは、資料的にも理論的にもとくに大きな意義があるものと評価できる。

しかしながら、本論文ではイスマール派の活動が比較的肯定的にのみ扱われていて、社会の中でおこるであろうさまざまな軋轢、対立などにまで考察が及んでいない点、またイスラーム研究としては用語・概念の扱いに若干の再考を要する点、などの問題を指摘することもできる。しかし、これらはいずれもこれからの研究のさらなる進展によって捕われるべきものであり、本論文そのものの価値をいささかも損なうものではない。

したがって、本論文は学位を授与するに値するものであると認定する。